

廣益俗說辨五

公卿士庶

13

954

6

廣益俗說辨卷九目錄

公卿

一 田村利仁異國と征と俗と地不動明王より説附
田村利宗詮麻乃鬼より説訂補

二 百合君大良ひくもくも退治説訂補

三 在来河平須磨浦ふかくれ松風村より説

四 在来業平年云此年志とわらひ累天とより説

五 蟬丸延喜帝第四より中モウモウ育目より説附 四文の家

わら坂より説訂補

補 六 孫王純基禁座より説訂補 廣氏射より説

補紀實定^{キササ}冠^{カウ}氏^シ系^{ケイ}一^{イチ}貫^{クワン}之^ノと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}

補平^{ヘイ}盛^{セイ}雷^{ライ}小^コ松^{マツ}と^ト後^{ノチ}

補右^{ミダリ}政^{セイ}大^{ダイ}師^シ長^{チヤウ}入^{イリ}唐^{タウ}乃^ノ汝^{ニョ}汝^{ニョ}汝^{ニョ}

新源^{シンゲン}實^{ジツ}胡^コ公^{コウ}曉^{キョウ}と^ト執^{シツ}と^ト後^{ノチ}

廣益信說辨卷九

井澤長秀 輯錄

公卿

一 田村利仁^{トシキト}異^イ國^{クニ}氏^シ征^{セイ}と^ト後^{ノチ}不動^{フドウ}の^ノと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}

附 田村利家^{トシキヤ}於^オ廉^{レン}乃^ノ鬼^キ氏^シの^ノ後^{ノチ}

信^{シン}茂^{モウ}云^{イフ}坂^{サカ}上^ノ田村^{タムラ}九^ク利^リ仁^ニと^ト征^{セイ}伐^{ハツ}と^ト後^{ノチ}數^{スウ}萬^{マン}の^ノ

兵^{ヘイ}隊^{タイ}と^トわ^ワる^ル後^{ノチ}不動^{フドウ}の^ノと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}

不動^{フドウ}明^{メイ}王^{オウ}と^ト大^{ダイ}お^オと^ト海^{カイ}上^ノと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}

う^ウち^チ勝^{カチ}て^テ利^リ仁^ニと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}又^{マタ}云^{イフ}く^ク利^リ仁^ニの^ノ子^コは^ハ伊^イ奈^ナ津^ツ

み^ミ部^フ田^タ村^{ムラ}利^リ家^カと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}勅^{チツ}氏^シ奉^{ホウ}と^ト後^{ノチ}於^オ廉^{レン}乃^ノ

乃^ノ大^{ダイ}竹^{タケ}丸^{マル}と^ト鬼^キと^トわ^ワる^ル後^{ノチ}乃^ノ大^{ダイ}竹^{タケ}丸^{マル}と^トわ^ワる^ル後^{ノチ}

以子創とて山放あかきとて田村之利とてあひぬ
 そとろ経麻山ろ藤よ経麻河赤とて女あきとて利
 宗むそと小通とて大竹也とて急想しける故田村の
 女とてわつそとて大竹也とてせ二つろ創とてぬと
 せそをわち経麻よをいへたよあかて畏氏付とてあ
 あひはけと田村の身りおきこれ親者あきとて畏氏射
 ころころとて色いふ

今按ふに坂上田村麿と利仁と一人に於て別人なり姓氏録續日本紀に接は田村麿は後漢靈帝の後めして坂上田村麿の子孫像天安の御宇人也

大系系狀考終了利仁ハ大織冠孫足公コライニ後胤淳
守府フツ乃軍クニ・フチハラノヒキ後奈時長子醍醐天皇乃濟宇人タケコ也
但續日本紀シヨク上大臣寸荊田麻呂等上表言
臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後也譽田
天皇應神御宇歸化來朝すところ我見まはと云々漢
皇乃後めて日本改化人なりけ歟と書さるてり爲
るふゆと事ふとわやうあや又不孰明主にうと
新羅元祿方り日本後紀云弘仁二年五月丙辰
大納言正三位右近大將兵部卿坂上大宿禰田村
麻呂薨於栗田別業時年五十四。田村麻呂從三

ぬく神カとて人殺可れ軍者^{イナ}は現^{イナ}一山を執^{イナ}握^{イナ}とて
 ちりて終^{イナ}小先帝^{イナ}乃軍やふと大^{イナ}お軍^{イナ}を京^{イナ}仲^{イナ}成^{イナ}
 宇^{イナ}合^{イナ}曾^{イナ}孫^{イナ}種^{イナ}継^{イナ}長^{イナ}ふ
 右^{イナ}兵^{イナ}出^{イナ}智^{イナ}は四^{イナ}位^{イナ}下^{イナ}
 之^{イナ}由^{イナ}に^{イナ}是^{イナ}云^{イナ}云^{イナ}某^{イナ}云^{イナ}云^{イナ}
 死^{イナ}一本^{イナ}云^{イナ}第^{イナ}四十^{イナ}奥^{イナ}列^{イナ}乃^{イナ}高^{イナ}此^{イナ}無^{イナ}活^{イナ}と^{イナ}爲^{イナ}此^{イナ}賊^{イナ}徒^{イナ}と^{イナ}誅^{イナ}
 と^{イナ}い^{イナ}は^{イナ}る^{イナ}は^{イナ}る^{イナ}夢^{イナ}て^{イナ}妄^{イナ}作^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}又^{イナ}於^{イナ}廉^{イナ}御^{イナ}前^{イナ}と^{イナ}
 諸^{イナ}神^{イナ}系^{イナ}圖^{イナ}は^{イナ}伊^{イナ}蘇^{イナ}並^{イナ}云^{イナ}代^{イナ}祀^{イナ}ふ^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}是^{イナ}等^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}
 一^{イナ}信^{イナ}院^{イナ}乃^{イナ}わ^{イナ}や^{イナ}ま^{イナ}り^{イナ}を^{イナ}知^{イナ}る^{イナ}一^{イナ}此^{イナ}條^{イナ}加^{イナ}訂^{イナ}補^{イナ}
 二^{イナ}百^{イナ}合^{イナ}義^{イナ}大^{イナ}臣^{イナ}ひ^{イナ}て^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}退^{イナ}治^{イナ}此^{イナ}院^{イナ}
 信^{イナ}院^{イナ}云^{イナ}信^{イナ}院^{イナ}天^{イナ}皇^{イナ}此^{イナ}御^{イナ}宇^{イナ}豐^{イナ}後^{イナ}の^{イナ}國^{イナ}主^{イナ}
 百^{イナ}合^{イナ}義^{イナ}大^{イナ}臣^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}人^{イナ}強^{イナ}カ^{イナ}精^{イナ}去^{イナ}形^{イナ}ひ^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}と^{イナ}い^{イナ}ふ^{イナ}日本^{イナ}城^{イナ}襲^{イナ}時^{イナ}

而今若物^{モノ}成^{ナリ}うけ給^{タマフ}を以てせむひびきとくつと成^{ナリ}
射^サとろし帰^キ郷^{キョウ}に及^{およ}ひて家^カ臣^シ別^ヘ府^フとす者^{モノ}叛^{ハン}逆^{ギャク}し
大臣^{ダイシン}と元^{ゲン}界^{カイ}傳^{デン}ふすて垂^{タリ}冬^{フユ}後^ゴは乃^{すなは}ち國^{クニ}城^{シロ}押^{オシ}領^{レウ}を大臣^{ダイシン}
ふ^リと^ヨ海^ア士^マ形^シはあすをせむとて國^{クニ}城^{シロ}一^{イチ}別^ヘ府^フとせ給^{タマフ}
は一^{イチ}國^{クニ}城^{シロ}治^チむと云^{イハ}傳^{デン}人^{ジン}冬^{フユ}後^ゴ府^フ内^{ノウ}は大臣^{ダイシン}據^{ツカ}わりとせ給^{タマフ}
小^コ綠^{リョ}丸^{マル}せむと云^{イハ}傳^{デン}人^{ジン}冬^{フユ}後^ゴ府^フ内^{ノウ}は大臣^{ダイシン}據^{ツカ}わりとせ給^{タマフ}

今按新ユリ百ヨリ合ヨリ系ヨリ大臣ヨリ之事シ心シ史シ實シ錄ヨリ及セク公キョウ卿ケイ補フ任ニ
 多シ卑ヒ分フ脉マキ等ト也ナリと見ミくとも但ツ據ヨク章シヤウ記キ 河内張小侯傳云
 乃ナリ領リョウ主シュ三サン並ナニとス者モノ神カン功コウ守シュ后コウ三サン韓カン征テイ伐ハツ乃ナリとス此コノの先マデ
 鋒ホウ乃ナリとス此コノの九ク代ダイは百モ、サト里リ十シ代ダイは百モ、ラ男ナとスこの

百男うゝ益躬蒙古日本は襲ふる時推古帝の
 勅依奉てとせむひ賊の魁首鐵人を射殺と益躬
 孫玉真子細わめて按列羅波は流刑せられ後倭船
 と得て帰國と益躬も末葉河世一族盛人は別府と
 してものねほ歴代皇紀編年集成八幡愚童訓等
 と考ふ弘安四年蒙古より高句麗と案内者也
 して日本と襲ふ琉球多めて大風よわひ船よ
 進くゆつとて死者多し同書志摩郡鷹嶋玄界嶋
 元史五龍山とわかれなり
 け船の事傳は後兼風とわかれなり
 等よりき船はあつひのりかふとわりじやうくやふ

蒙古高勾驛なり。通鑑東國通鑑北史ハシに
 勾驛と書し。後漢書網鑑コウカン、全等ハ高勾驛也。
 記さる中原康富日記ヤスヒミは高勾驛とくまると訂正名
 目抄モクサウハ番本音りフネとあり。西峯翁云高麗世為日本
 人モリ到于今罵異類曰二年苦利骨チリボネ也。附庸而終黨蒙五故日本
 口雖乃蒙古高勾驛之轉音也。おもふは百合若大
 長事ハ是等此注ハ播て化へけぬとわやう
 傳へて好事者其墓を代築せりキツ人。此條加訂補
 三在尔平次摩浦アリハラユキヒラスムアウラなる松風村マシカゼ多連況タラサメ
 俗説云中納言左尔平次親人名然サニといひ接尾國
 次摩浦スミナガハなかりとゆい下木松風村多と姉妹ハ張女テウメ

中より初め人を見てとわつて盲目ありて後
 魚一又延喜帝の皇子といふ歌詠ハ保元平治
 小付人なることより延喜六年より右今集歌撰
 多岐醍醐帝御とわつて二十三年おなせ給
 後醍醐天皇へとわつ。補名抄よ云今歌
 中ハハむこれ堀丸本朝遼史云蟬丸ハ式アマ敦実親王の
難色なりよく琵琶を弾き度成楓城よ
 祇とたりてすも後ハたぐへむうとくこれ帝乃
 御使ふて和琴ありは良峯宗貞良妙とて
 まんねとの事とておなけようひていふくこそ

方丈記云くこのみしれ秘紙なり
良事家奥世にぬいどとをふ
^{ヒロキ}
小世継なる小將雅三位本帳よりあけ育傍は現經と
^{ミツシウ}
明くある紙假して謄する所ありや
^{ヒサカネ}
雅三位々近嘉帝乃孫なり時代大に相違り又延安
乃幸尤妄説なり國史小説紹運縁少も是くと又王
坂田多じの事跡非なり補日本紀云仲哀天皇
御宇武内宿禰追忍熊王遇于逢坂也わさ上代
より逢坂乃名わりて紙あり一又小町家集は四文
うせ給へ多うといめてかぜよくおけるりハかきし乃
るもの山をましましあさるゝ中よハとわさ八短

志は四より第一の仁明帝第四人康親王の舊跡
を多敷く号すと記す 此條加訂補

補 六孫王經基禁庭を以て應氏射所

俗伝云六孫王經基禁庭を作せしは河内といはく
しと本八等といふと應氏と云ふて是はわが地
なりと經基之れと射所と云ふ

今按多の記況據たり但し今昔物語はむろ三條
院春より東三条はゆくけちと云ふるが寢殿の
裏よりなる西乃櫓は概して居るなりと云ふ

俗伝一より云ふは春より河内と云ふは
かの狐射と云ふ傳を云ふは光やうかたのハ征
兼中より仕方と云ふより云ふは墓目ハ光の
うへ射つてうへと禱し一糸を云ふ河内よりかまの紐
よりかづ表衣ハ袖状より云ふと云ふは
あてよりかづより云ふは河内より云ふは
はらより云ふは河内より云ふは河内より云ふは
賜ふと云ふは河内より云ふは河内より云ふは

補 紀實定冠と云ふて貫之と改る

俗伝云奈良帝乃河内と云ふは紀文幹より実定河内

今按ふに後元非なり定れ字の冠と除きて之
乃字と思へる事と御字字とて其の字とてある者
此妄作なり右の新代郡佐方り世之の奴僕もよ
うとて若くは字をよけ後ハ盛衰記に一乗院乃御
宇小大納言成いま上人
右事談云行成付時
佐木公武は衛尉
中

古事談云行成於時
值承平多爲衛尉
史記

ちりけぬる糸同乃折あり実方中ね糸合して小糸
而も着座しきるにけぬる同より此意趣ハあらと実方
勢成取盡して形成乃冠紙うち落し小糸よかけと
てきりけねは行成ハさるる後主役司成めてかり成
るるせめて實方を綴していつか事よ惟もや身小
覺へ惟も原を放てうけきぬるして報答にさんとい
ふれきけんと主上小部乃けりて御供して行成と
穩便なるものなりと敬感よわたりて人歌よなされ
實方ハ軟枕志をくるとして陸奥に流るる又十訓抄
とわぬ糸貫之う事よはるるなりとて小糸よかけと

補

三
P

淨海抄

人難波

黃益谷脫弊卷之二

さめ所^ニも雷^{ライ}はねをれきうとわさ六法盛^{キモリ}といひた^サ
 もわるへ一書^旨を讀^{ヨミ}て死生^{セイ}有命^{アリタチ}ふととまらば
 何^{ナニ}致^シすかとも何^{ナニ}とうとうとじ若伊川先生傳^{イセニ}はな
 りとそに成^エわたり候^{フクニラ}ひく風浪大^{タカシ}はねをり舟中^{フネナカ}の人^{ヒト}
 皆^{みな}うつ然^{ゼン}うーなりまれな先生正襟端座^{テイキンタンザ}して神色^{シキシキ}
 泰然^{タイゼン}ありと二程全書^{ニサイセンショ}は見えずあり雷^{ライ}をねをれぬも
 又かたよく形多色^{カタタシキ}

補
太政大臣（古）藤原長入（古）唐乃汝法（古）孔經

倭寇を太政大臣呼長は天下にゆるびを絶琵琶乃よまか
アアハ入唐の事みちめてまの招引より下向一決断せ

後屋に宿し給ふ宿れわねハ老翁老婆なつて
 かまうつものそふまうせ現世といふかあそふち師長の
 守りぬて老翁ハ現世といふ老翁ハ琴とてうつて感
 ずねあうりなり師長大に於てうきわも目おめ
 現世乃奥候とき先づいふうてうかさんといひ
 一ふ日かあもかあうもわあといふ市街後唐とてま
 ち松原にてあかしく名残同給ふは今とてあかしく
 屋さわもまうとてまうとて村上天宮梨壺女河な
 河身入唐うせんあわうそれなりそかたけとて
 うきうの初と帝乃河うお三面乃現世のうとてうき

山御子丸吉となり

今按予は後醍醐天皇平盛衰記云治承三年十
一月太政大臣藤長と尾張國井田となり奉詔わ
る時南國勢同く御子丸吉となりて御子丸吉なり
乃納受のふし法施と日向をまじへて後ハ琵琶と
深しあひ御祈念とねりてあやうく物と作るは
厚わめて御琵琶とかなとて上玄石象といふ秘曲
と深しすくは深しはこれ神明此感應とねりて
寶殿大い執擧し明神記してねりまき今強し
深しそらうの秘曲感とあきとねりて向より表死すなり

深しそらうの秘曲とて上玄石象此二曲とて山を奉ま
かりかたうとねりて後ハ深しと御記をわ
又云村上天皇此御子丸吉とねりて深し
深しそらうの秘曲とて上玄石象此二曲とて山を奉ま
わりて後ハ深しとねりて向より表死すなり

新源實朝公曉の秘曲とて上玄石象此二曲とて山を奉ま

信長云建保七年四月廿七日右大臣源實朝公曉は八幡宮
多宿とて山系義時御子丸吉なりて御子丸吉なり
時太らうとねりて向より表死すなり

二神此内成神乃告わう一書成るひわも中系仲業
 二所叙とゆり退出とかなぬ実朝と一時は仲業きくもぬ
 我討て奇揚の感一某原堂と建之とくふ
 一書ふく小條系時挑推して其威なるぬをわう
 ともくも実朝係氏乃統わうて大樹乃位よわうて
 舊臣乃統とかりけく故を推とかりひまうふうる
 わうて成る後よりて実朝と教して初より系係小
 ちひ鎌倉にまうて系を推とかりひまうに人
 ち成るひ家人横守本ふふものをはうて
 成るめて實朝と執せむと死を。予も後より推て

うく小條時政義時等して天下成并吞とゆれ公
 わうて成るのうゆきけとかなぬ和国畠山等と推し
 実朝とまうてわ家と害一
 我と詳は悪策かりゆり
 我家れ子若我を信と取一
 公曉と号して露思ふ
 系一ゆ人として公曉とくめて實朝とくく一ゆ其
 教かりて公曉と推して公曉乃血脉とゆれ
 小形後一ぬ
 是より成るれ系系能れ系系は天下とく
 教系一ぬゆりて中系系ゆりゆりゆりゆり
 是より成るれちの軍代号
 わうてくも天下ハ成るのうく小系系れ家推となれ
 実朝教系一わひ系系初義時かりて公曉と公と合る教

病と称して退きし世人のさうひとさひおれきみの
 害のつとめし薬師佛の御方よりなり薬師
 堂の建衆の成りてはまゝ一世人のさうひと
 いふも是萬世の成りてはまゝ

廣益俗說辨卷九終

廣益俗說辨卷十目錄

士庶

一 浦子蓬萊小いまり三百四十餘年と経て

新藤原千方

同 都良香仙をたふし 附 羅中門鬼

二 依教を秀卿三上山の蜈蚣と射る 附 同人將門

討死 訂補

三 苅原忠文將門退討り賞をたふしと恨て悪霊と

新平維茂戸隠山乃鬼成りてはまゝ

四 信太小太郎

八 源光順願寺にて討死 附 土蜘蛛の死

補 頼光家は四天王一人武者の死

補 渡邊綱相馬良門にて討死 附 綱詠の死

新 同人宇治橋姫宇多森鬼羅生門鬼と斬死

同 公時ハ血氣の勇士也云云 訂補

廣益俗説辨卷十

井澤良秀 輯録

士庶

一 浦嶋子蓬萊に上り三百四十餘年を後へ帰死

俗説云雄略天皇の御宇に丹後國餘社郡の人水江比浦

嶋子名はるみそ大龜と化して得に化してて又女を

かき浦嶋子け女とて蓬萊にいそり三百四十餘

年経過る淳和帝の御宇天長二年の日本紀に云く

或云日本紀云雄略帝の御宇二十二年七月丹

後國餘社郡管川の人水江浦嶋子蓬萊にいそり

わし舎人親王の日本紀と奏上せしむハ元正帝代

養老四年八月廿日と續日本紀より云く其の被浦宿
 子蓬萊より海を越て日本紀編纂に示しあるに
 ありすハ親王何よりして浦宿の蓬萊より云々と
 其の終る人の子ハ聖武天皇朝より云々されしをい
 へる系葉集より浦宿の古くより死せしと云
 りせる紙見るとハその後百餘年を経て淳和帝の
 御宇より云々と云浦宿の八回を云く人の子と
 云々なり

新藤原千方後

保元元年天智天皇御宇に在る子方ハ其の叛逆と

彼千方金鬼風鬼水鬼隠形鬼といふ四鬼は彼千方
 彼等と從へる伴等伴等と押領とあるに紀朝雄とい
 ふの宣旨に於てハ彼等ハ千方一背の者といひて鬼
 の中ハ千方ハ其の最悪なるに 亦も本とわつたこと
 此の由はハ千方の鬼のすゝたなる人其の四鬼けり其の
 足て我等惡逆を道り長に云々といひて其の政有通人
 其のしき奉ること天罰のつゝあふかきとて迎ふ所
 其れハ千方いさほひと云々といひて朝雄より云々といふ
 今按るにハ彼舊事紀古事記日本紀及清實錄
 小見く彼等ハ其の姓ハ大織冠縣是云々といふ姓ハ

新
都良秀伝とカカ附
躍生ウ鬼ウ次

附
躍^ウ生^キつ鬼^キつ尻

可
多
子

術と學を奉正史實録に賈るを祖し良書の

神仙築小三壺雲浮七萬里之程分浪五城霞峙
 十二樓之構捕天四九三十六之天丹靈之洞高
 關八九七十二之室青巖之石削成見千本 朝文粹
 當時人少膽多夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 好事者仙術夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 鬼此詩冰夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 門乃上夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 以子唐才子傳小宋之間錢塘夢 祇祇祇祇夢
 以子唐才子傳小宋之間錢塘夢 祇祇祇祇夢
 宮堯龍宮隱寂莫夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢

樓觀滄海日門對浙江潮中夢 祇祇祇祇夢
 傍少身夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 久夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 け夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢

二依夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 と封夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢

俗況云因夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 火夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢
 新神夢 祇祇祇祇夢 祇祇祇祇夢

堂類とてなりや次とて一つは終つて一つは始つて
かたはなかり橋とて一つは終つて一つは始つて
さういふはさういふはさういふはさういふは
ひつと秀卿とて一つは終つて一つは始つて
へつと秀卿とて一つは終つて一つは始つて
らうと秀卿とて一つは終つて一つは始つて
さういふはさういふはさういふはさういふは
財成秀卿とて一つは終つて一つは始つて
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは

秀卿とて一つは終つて一つは始つて
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは
さういふはさういふはさういふはさういふは

多衣也次曰紙瞑カミとて殺カスとてりる事ある一はきわい
 せし中意致遂ヨク一呼ヨクとけあふ後大近サミといふ者
 將門カミとて矢うふらそ射サとて糸の依タハラなるを係ハカキとて
 一ふまれば彼首カミ呵カとて笑ワケまけう眼メとて肉ニクとてれて
 忽タチと枯骨コボツとて死シに糸うけ妖怪ヨウケイとて終マタる伴タナの骸カガを埋ウツ
 せんとすヤシロ社ヤシロ建タテ骸カガ明神ミナカミ一一又又獨ひとり眼メ人ひとの神カミと云云中ナカ號カウ
 けあふ後ノチあふ糸イトて神田カミタの神カミと稱ナヅケとて云云つえ
 秀卿ヒメサトと志良シラと次

今按イマふは淮南子ナンニ註チウニ云云蟬セン蛆シュ蜈蚣ゴコウ也也性能ヤイ制ヨク蛇ヤス見ミ
 大蛇オホヘビ便縁ベンエン上ウヘ瞰ミ其脚ミ王カウ匣ハコ記キ云云蜈蚣ゴコウ制ミ大蛇オホヘビと云云

蜈蚣ゴコウ乃蛇ナニヘビとトは凡ソノくさう蛇ヘビ也也中ナカも蟬セン田タ蚰カウ蚰カウ
 大蛇オホヘビ乃蛇ナニヘビと云云乃ナニ楊ヤウ上ウヘ依ヨシ居イて性ユキ来キのノ人ヒトと云云
 とうらふとさうらふ蛇ヘビとて糸イトをれわめてかきつカキツ
 怖コウも勢セとてから斂セツとて其軀ミよきすのちムカデ脚カミ
 よかやまされしとて糸イトをけとて人ヒトと云云
 卿カ彼大蛇オホヘビとて中ナカへ入イリ訪ミタスふといふ事コトを妄マカシ誕タン
 たり人ヒトとて底ソコよ蛇ヘビとて世界セカイわらんや表モト蛇ヘビ神カミ
 秘ヒ術ジュツとて假カとて世界セカイとわらうとて人ヒトと云云
 目メ蛇ヘビとて中ナカへ入イリ訪ミタスふといふ事コトを妄マカシ誕タン
 也也か蛇ヘビ妖怪ヨウケイとて人ヒトと云云蜈蚣ゴコウと射サふと云云

長橋ニツナを教ヨクて後書キョウショを讀ヨミて忠孝チウコウ乃シ士シとなり
 一ニツナと同日ニツナ中ニツナとニツナ秀ヒデの如ニツナなる人
 又依ヨをたすゆねは依ヨをたすといふは誤カウなり
 卿系圖ニツナは任近ニツナに國依ニツナ在ニツナ以故號依ニツナをたすと記キす
 又將門ニツナの孫ニツナ叛ニツナは依ヨて秀の宜旨ニツナをかりゆ下總ニツナ
 秀向ニツナ一ニツナ叛ニツナといふは利ニツナなき故ニツナなりて將門ニツナの
 秀の如ニツナなる人通ニツナ一ニツナ將門ニツナと射ニツナの如ニツナなる人
 冰ニツナなり將門ニツナ記盛衰記等ニツナと考ニツナは秀の宜旨ニツナをかり
 ゆといふは誤カウなり將門ニツナの如ニツナなる人下總ニツナ

終るく同意して相成りてけ奉る人とし初
 むるひもは將門の爲體輕忽として天下の掌握を
 失器とわくはとてひを成るる人一本國下は
 平貞盛とて是をわくは成りて將門を
 せび矢盛るる人將門をわくは成りて
 次秀は其首と捕とわく補又秀卿將門の妻を遁と
 ねと氷より俱に今昔物語云將門貞盛とて是を
 は貞盛軍取とて矢盛の妻とて捕軍士等これ
 通とてわく此は將門の妻とて矢盛の妻とてわく
 終とてわく是も風をぬきしに我ぞとてわく

今按予は將門の討ふやうして貞盛忠文發向とて
 況やあやふしむと將門記古事談今昔物語と考ふ
 に將門其叔父國香と害しそと衆科のふふと
 とてこれねとどけらぬ國香うゝ貞盛忠文陰に
 物余とがうやうすやうとて親の敵をうゝゆゑ
 秀とて發して將門とせむは半路さうえきんハ
 其となくともと云

今按予は將門の討ふやうして貞盛忠文發向とて
 況やあやふしむと將門記古事談今昔物語と考ふ
 に將門其叔父國香と害しそと衆科のふふと
 とてこれねとどけらぬ國香うゝ貞盛忠文陰に
 物余とがうやうすやうとて親の敵をうゝゆゑ
 秀とて發して將門とせむは半路さうえきんハ

討ふは太田軍後忠文副將軍刑部忠舒教位
 源經基發列やと下向とて將門とてに伏誅れ
 小のうと上洛すも見くまう若忠文貞盛と同時
 發向とは貞盛の發下経とて何れねむ
 其身ハ後河よりゆらんや又忠文賞なりと云
 死とて云々事跡なり王代一覽は天曆六年六月
 議後忠文年と歳七十五中納言と賜るあや
 わり將門追討は天曆三年より忠文年と云天曆
 六年より其際とて十三年に及ぶと云
 信託の相違はなり一但し似る事なり若お

為長ろ十訓抄、齊信太相、幽菟系、民於宰相、
 中死才幹、と先子、とて見れ、誠信乃、
 て中絶、信にたると、信乃、誠信わつ、
 七目といふ、恨死に死、
 終る、多、死、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
 帝王、下、と、と、と、と、と、と、
 其、と、と、と、と、と、と、
 終、と、と、と、と、と、と、
 人

新平維茂戸隠山、鬼、斬、
 世、と、と、と、と、と、と、

信、云、平、維、茂、信、別、戸、隠、山、
 入、と、と、と、と、と、と、
 紅、葉、粘、と、と、

今、按、多、と、非、明、り、但、
 諸、但、と、と、と、と、と、と、
 残、着、と、諸、但、と、と、
 卒、と、と、と、と、と、と、
 但、と、と、と、と、と、と、
 猊、と、黒、青、と、と、と、と、
 と、と、と、と、と、と、
 先、儒、乃、終、代、

考へ見ると世人道徳なりとて人さうと此の其所わ
 けりといふ事ひすなれどもそにさういふ事なく
 凡そ物候の性と思ふに日月星辰雷風霜雪これら
 希に見へるや一むへ来れども常にさうなるは
 りとせ候ふや一理の正と不正とわたりあつて
 寒く一夏熱く一云さうな秋のや一理の正たり
 けりといふ事わが正不正たり庭前此樹木
 の風成りて花とむく一理の正たり冬月
 雪なりて雪とむく一云さうな花の正たり
 雪なりて雪とむく一云さうな花の正たり
 雷風雨の造化なり此の正なり

系傳云其母小太郎初釋乃乃婿乃小山太郎系
其母云一に小山公なるを以て領地とすといひ小太郎と
母代進出と小太郎は此十四歳なるに母もも
たひに別番場乃宿とて一に母もも小太郎死
まへ小太郎又四歳とて信長を以て養ひて
龍城一とていひまへ信長を
生捕もて小山公人ふを以て有き親と信長
姉と目成志のひふを宿とて系圖と小太郎は
その其後小山公に令て信長を成海と改め
ふ系傳ありて信長を其母と落きて子と運

成海と云小山を討て小領安堵と信長は姉尼とて
小太郎と尋ね諸國と云々一と云信長其遠近
みわつと云

今按云今昔物語は將門の子良門其子亮念也
わく大系圖發公集は將門の女子如亮尼の事わくも
小太郎の事ハ見く信長は氏代事書小太郎
は希なり續日本紀云常陸國信太郡人物部國
依改賜信太姓又云同國同郡大領物部志太連
大成姓氏錄云信太首百濟國人百年之後也徒
然系に丹波と云ふと云信長はわく一と云知不

是なりわい
 又此等判官乃義二男孫我弘常陸國信太郡一信と
 信太三郎と号し盛妻兒平家物語浪東盛と云く
 信太と云信太小を弟と云者か一信太草子代肉と
 信太と云信太をいて信太と云く孫は此光に
 代乃孫三回和又女とわい天慶此より六孫と經
 基乃時よりて和光いすこももとんや代此孫と
 や其偽知ぬ一疑くハ孫倉管領持氏乃子青王丸
 安王丸不くに信太一信太氏朝と和信太一信太
 けり信太信太討て後各々捕まはれし乳母を
 乳とて取よと云ひハ半信太戰場死より
 後安王丸乃子永王と云ハ官領と捕一成氏と号

とも父兄乃仇なりやとて享徳三年十二月廿七日上杉
 憲忠と謀ちて事鎌倉九代記旅宿同参駕ふ見
 えまうり是等とてわを居流く子死事誠法
 了とてそめや諸國は信たり姉の事然ち家ハ
 右なる信然事形と伏せて後世好事乃本お人
 五源頼光酒顛童子伏討死付土蜘蛛乃死
 信然云酒顛童子中より鬼丹波乃國大江山は役て國
 土乃強し如ふ故按津寺源頼光は勅してうへめ
 源頼光保昌細公時定光一足ス季武山依は出立て
 大江山は忍へ入源頼光の出入りて事子にのまじり

醉^ニふに及んと三社^ヤ乃神童子^{カミ}く是^{アレ}成^{ナリ}か^ニめ^ニ於^ニ於^ニ光^{ミツ}小^コ若^ニ
 子^コと此^{コノ}各^{ナニ}童子^{コノ}成^{ナリ}切^キう^ウろ^ロ一^ニ其^{ソノ}う^ウろ^ロ市^チ代^{ダイ}婦^フ等^{トウ}成^{ナリ}相^{ソウ}
 具^{ツク}一^ニ上^{ウヘ}落^{ロク}と^トや^ヤい^イろ^ロ又^{マタ}わ^ワろ^ロ此^{コノ}去^キ蜘蛛^{クモ}一^ニけ^ケて^テ於^ニ於^ニ光^{ミツ}を^ヲ
 た^タや^ヤと^ト落^{ロク}一^ニに^ニ於^ニ於^ニ光^{ミツ}大^{ダイ}方^{ホウ}と^トぬ^ヌて^テ一^ニに^ニ成^{ナリ}き^キす^ス糸^{イト}ハ
 ち^チと^ト一^ニて^テゆ^ユけ^ケう^ウせ^セぬ^ヌけ^ケた^タと^ト若^ニ若^ニ保^ホ呂^ロと^ト令^ニ一^ニて^テ一^ニ
 う^ウ血^{ケツ}成^{ナリ}と^トい^イて^テ終^{ハシ}る^ルと^ト蜘蛛^{クモ}と^ト成^{ナリ}う^ウ一^ニじ^ジと^ト一^ニ

今按子^{タニ}ノ賴光^{ヲウタ}仍顯^{フキ}童^{タカノシラ}子^{シツ}氏^ヲ實錄^ヲノ見^ミ々^ミを
但^{タニ}源氏系圖^ニノ賴光^{ヲウタ}誅^{フキ}伊^イ吹^{フキ}山^{ヤマ}凶賊^{ヲウタ}とあり古今著聞^{キコト}
集^ミノ市^シ帛^{ハク}中^{ナカ}ノて牛^{ウシ}牝^メ猴^{コウ}ノかくれ^{カクレ}居^イテ鬼^キ同^{ドウ}なり
之^{コノ}者^{モノ}氏^シ賴光^{ヲウタ}切^キ殺^{コロス}セリ子^{シツ}氏^ヲ實錄^ヲノ見^ミ々^ミを
之^{コノ}者^{モノ}氏^シ賴光^{ヲウタ}切^キ殺^{コロス}セリ子^{シツ}氏^ヲ實錄^ヲノ見^ミ々^ミを

して世は傳ふありや又異邦は似き事なり梁
 武帝より大同二年に歐陽純といふ者山中と通ふ所
 其書残卷より云く純純よりゆき名残るの嶺残る
 溪谷傳ひてゆくに書ありけり履を脱ぎて山より
 下りて知達兵三十人よりきくぬくわき入ふ南
 小わたりて平山より山より縁樹枝代へれ响る流る
 りく純純等漸く葛と傳ひ本紙よりて此は系に
 ともして石門ありけり女數十人わきひ居るなり
 純と見て招くなり何故と尋ねると同純は云く
 事なりと云ふ彼女等より云く多婦人ハ痛おゆて

床よりわきて枕より出て門へ入ふ床より出て扉と
も其中廣く床より上より綿と志なり枕より書ハ石
乃榻の上より如きより諸女よりわきても書
書よりひくく鬼神よりも出て書よりわきて
一今鬼神もてに他より他より酒二斛大
十疋麻敷十疋と持来くハ我等きみと相よりひて
鬼神よりひくく一ひくく鬼神に秘より好んで衣
くく酒然より酔くく衣ハたよりききと
み色練よりひてききと床よりひひけくひ
ねくく六練よりひてききと色練乃中

練より色練よりひて後よりききと床より
但し一層よりひて鉄よりひてききと
臍乃下より肉身より帯より衣より衣より
衣より衣より一側より衣より食物衣より
所より衣より衣より相より衣より一と
肯より衣より衣より酒より衣より衣より
衣より衣より酒衣より衣より衣より衣より
衣より相より衣より申より衣より衣より
枕より衣より衣より長六尺計より衣より
衣より衣より衣より衣より衣より衣より

源頼光征伐して東國より向ふ良門とありて
源頼光良門と組て其首を斬りて又ち其の地を
見ゆる事何とぞ人

今按ふ今昔物語に平將門の子良門金泥大
般若經一部と書寫して依養と良門の子信と
なりて慈念と号と陸奥國小松寺に傳へて常
小地蔵と信とありていふ事と良門の孫達依養の
幸諸實録にありてあり其妾延福とありて源
又頼光の地名とありていふ事なり後撰集にあり

子女は悲ひてかゝる事ゆゑかとも志ざりしは
人よそれいふに傳されし人なりと死
名をいふ人よいふにわらぬ人よいふにわらぬ
人よいふにわらぬ人よいふにわらぬ人よいふにわらぬ

新渡邊綱字信橋娘字多森羅生門の鬼代斬
信光の娘とありていふ事なり又ち其の地を
見ゆる事何とぞ人

一、矢田、一条及橋よてゆゑわの鬚切矢掇て鬼うま
切て海毛―樵よいまそて七日ういゝ門戸を閉て
きうゝに細う書母指津回渡迄う来て得ふ
わひ鬼うま矢見ひゝて矢をふうゝひ多てみけ
と海毛―うゝて矢切と鬼水とわゝゝひけ矢多
田滿仲孫亦此回之笠取山乃飛落ゝゝゝゝ
了とゝゝ。一説よハ程羅生つ中鬼れゝ矢切―に
鬼細の母よをけて方々をまゝゝゝ。一説よハ大和國
宇多森よ鬼わゝて往來乃人を害と源賴光渡
邊にけ鬼戦討てあれと重代乃太刀を懸う

とれハ彼下よ趣くに森の中より程羅羅生
掇て矢切刀矢ぬいて鬼れゝ矢うゝ―賴光に
見せけゝハ賴光樵よたゝあ七日うあゝ門戸と立
あゝと居ゝれを―河内國う安乃里うゝ
光代母来ゝゝかの鬼を多矢をゝ見うゝひ
鬼とたゝてふまゝんとす矢切賴光刀とぬきて鬼
歌を切れと矢をゝひ左刀と鬼切とゝを後ひ
た力多田滿仲乃ゝ渡て鬼とまゝゝ右れた力ハ
伯耆回舎見都大系又亦た支安程う傳ゝて時
武將田村將軍よ奉とゝ是ハ終麻沔亦田村將軍と

新座山々 飯合の石也

今按ふに公卿の如嫉妬此情少くして其布祢
の社よりて鬼おあしてまゝと祈るの神乃
もろゝひよりて鬼と相るゝと事非なり貴布
禰社ハ高麗と云ふなり神代卷云倭禁諾尊斬
軻遇突智為三段一段為高麗日本後紀云弘仁
九年五月以貴布祢為大社賀茂氏記云為平安
守護所祭也蓋日域地主神明也又其天神也
姦惡の婦婦にくみして世のいひに於て多
や又宇治橋姫ハ魔魅なる次
頭注密勘河海按説又同 恒若大

の神妃姫大神在宇治橋西岡号橋姫又号宇治

玉姫神社考雜列 古今集よさむらゝ衣がき

あふゝやわも我まの身んうらゝ橋姫又ハ宇治
乃の御免也所り同抄よけ寄ハ恒若大の神代術

うゝと記さうゝも我もめて俗流のわやまり代
定あゝの流しにさきめめくう橋姫のよれこもあよけ

流々古今著宇集袋多き等小和泉式部男代り
うれたる我秋も衣布祢よまうて祈るゝハ忽ち

感應あつゝと我載さう式部集 又延暦和尚就
西濃國の婦已う丈化れ女我を世にを懐て髪成

ふ川よわ多能哉ねとてかあ角のやうに紅い袴と
着て鬼とわう同國の野中おわれ堂内は怪て初
赤子三半死にうたてくゝ高木の者をもひき
焚く人々堂内からみだ焚つてきて焼く天井よ
すかの鬼出ていゝ我は何何来う婦たりの嫉妬
にうた多鬼中ねつてまふいゝもせむ女はうら
殺し一は堂より光りて神をうけかゝて終り此世
一は焚くやういゝてきん中て火よ死入て死を
わう二事とさうわをせて妾化しや又羅馬
の鬼う事ハ右の信託し小異と殺るるにたたり

さあよあう又宇治橋姫羅生門の鬼網より
きゝれて終る母よをけ宇多森に鬼網より
きゝてあう光り母よをきゝる別よかゝるゝ
便にわう人きよをけかゝるゝにけゝれよに
あうやうされゝゝ一は焚くやう又鬼の鬼は
刀わうひは能き代能治と云又ハ伯耆の能治と云
とあうやうは能きと云んや又ハ刀後よ多田波仲の
もゝわうやう事非なり波中ハ光り父たり
あうは焚くやうにきゝるゝと云んや又田村磨
茶叙合の事ハ見女れとてわう人あ田村茶子と云

このは撰て書^キり妄誕論と云ふ事なり次殊に於
 廉冲帝と神系圖は伊集^{サナリ}並る哉祀^{ミヤコ}とあれハ
 倭族の相遠を知へし思ふは徳^{チカラ}鬼族切し三流ハ
 古今著聞集^{チヨモン}小市系中よりいひて鬼同九といふ者
 牛の腹よりかき出でて頼光と云ひけり一残渡迄綱
 こも然さうして射^{イデ}まらうし六鬼同九刀とぬひて
 頼光は切やれ頼光鬼同首線と云ふれまねを鬚^{カマダ}
 刀代と云て頼光の跡^{アト}あるなり赤痛と突首ハむな
 うひようひはききうりと記さうけ説は撰てけく
 あり半部半たり

詞不可極

此段訂補

